



昨日より今日
今日より明日に希望をもち
全力疾走を続けている
その希望を次の世代へ
企業人たちの田川に向ける
まなざしは温かい

企業が見つめる明日

レポート 働く現場からの声

不況のあおりで、田川でも減産や人員削減を余儀なくされた企業は少なくないだろう。掲載した企業の他にも数社を訪ねた。「影響は深刻」と話す企業もいた。しかし悲観ばかりしてない。「ここをどう踏ん張るか」「今からが勝負」と気概を見せていた。企業は逆風の中を必死に走り続けている。

「ハイテク産業だけが未来ある企業じゃない」。「中小企業は独自の技術が命」。経営者らはそう語った。その経営を支えるのは「人材だ」と口をそろえる。しかし決して知識や技術をもつ人材ばかりを求めているわけではない。「積極的に創意工夫を持って仕事をす

る人材こそが大切」。地道に技術を磨くことに、活路を見出してきた企業ならではの人材論。事実そういう若者に足元を支えられている。一方で若者の「職業観の希薄さ」を指摘する人もいた。競争社会の現実や仕事の厳しさを知らずに就職し、楽しさを知る前に辞めてしまう若者に胸を痛める。

しかし次世代への期待を捨てたりはしない。昨年は地場企業7社が、地元高校生を受け入れ、数日間職場を体験させた。今後も続けていくそうだ。若い力が地域経済の発展を担うことを望んでいる。

田川を愛し、若者に未来を託そうとする企業はたくさんある。希望ある明日を、決してあきらめたりはしない。

「未知」にかき立てられる挑戦者 佐野 正弘さん

(有)グロウテック【大字繻】

スラリと伸びた枝の先に、赤やピンク、紫のかわいらしい花を咲かせるアスター。田川の農産品として、知名度が高まってきた。栽培するのは(有)グロウテック。栽培と指導を行うのは花一筋40年の佐野正弘さんだ。

3年前から望岳台団地(大字繻)でハウス栽培を始めた。昨年は約65万本を出荷。東京、大阪、広島、福岡の市場に卸している。今年はさらに出荷量を増やす予定だ。

キク科のアスターは、仏花やフラワーアレンジメントに使われる。一般的に露地で栽培されるが、土壌の病原菌の影響を受けやすく、連作が難しい。ハウスでの栽培方法は、アスターでは前例がなかった養液栽培。病原菌を排除するため、地面から離れたプランターで、

発泡フェノール樹脂の培地に養液をしみ込ませて栽培する。この方法で連作を可能にした。周年栽培による安定供給を続け、市場から評価を得ている。

花栽培の道を選んだのは22歳のとき。実家は米や野菜をつくる農家だったが「どうしても花が作りた」と親を説得して始めた。旺盛なチャレンジ精神で、独自の技術を確立するのがスタイル。菊、トルコギキョウ、カスミソウ、アルストロメリアなどの栽培経験を持ち、一つひとつの栽培検証から技術を磨いてきた。

「技術が確立されていないものに挑戦するのが好きなんです」。失敗も数多く経験したが、そこから得た知識は確かだ。アスター栽培の初年度、想定外のトラブルが

続いたが、蓄積した知識と技術で乗り切った。2年目には「せり開催目に出荷できなかったのは1日だけ」という安定生産を成し遂げた。

花は田川のインシヤルを冠した「TGアスター」の名前で市場に流通している。「田川産」を売り込んできました。市場にしっかり認知されていきますよ」と知名度が上がってきたことが誇りだ。

仕事を離れても、住宅街の庭先や街路に植えられた花に目がいく。花が人の心のいやしになっていることを感じる。「花が好きで一般人を対象に、栽培技術の講習会を開いてみたいですね」。

次世代への技術継承と、花を育てる楽しさをまちに広めることが夢だ。

技術が確立されて いないものに挑戦するのが 好きなんです

佐野 正弘さん(62歳)
花卉生産会社代表取締役
田川市古賀町

